

上山藩医奥山玄育と荻野元凱

深瀬泰且

奥山玄育は出羽国上山藩医であり、明治初年に海軍大監・海軍病院長・海軍病院学舎長として、海軍軍医のトップクラスの座をしめていた奥山虎炳の曾祖父にあたる。

玄育は幼名を幸之助、長じて周邑まきくにと名のつた。奥山虎二氏所藏の『奥山氏系図』によると、文化十一年（一八一四）一月二四日に死亡したとあるが、行年は不明である。安永四年（一七七五）上山藩主松平信亨にはじめてつかえ、一二俵二人扶持となった。寛政四年（一七九二）ふたたび江戸詰めを命ぜられ、時の藩主信古の弟磐丸（のちの信愛）が四書の素讀をおこなうにあたって、玄育は師範役を命ぜられた。寛政六年（一七九四）御七代に昇進した。

文化元年（一八〇四）玄育は江戸留守居役を命ぜられ、上山を立出して江戸にむかったが、このころ大坂加番を命ぜられて上坂の途上にあつた藩主信愛は、道中からすでに病を発しており、江戸についた玄育はさらに上坂するよう命令をうけて大坂にむかった。医師の手不足のため、江戸から玄育がよびだされたものと思われる。その後も上山、江戸、大坂の間

を何度か往復している。

上山藩主藤井松平氏は、元禄一〇年（一六九七）に備中庭瀬から入部して城をきづき、以後代をかかえて廃藩置県にいたつた。上山藩は大坂加番を命ぜられることがおおく、明治維新までの一六五年間に三二回のおおきにおよび、その就任回数是全国の譜代大名の中で最高位をしめている。

大坂加番は西国諸大名の監視役ともいうべき立場であり、一旦事がおれば江戸城警備の最前線の役目をはたさなければならぬ軍事的予備軍である。そのため太平の世とはいえ、この加番はかなりの精神的緊張をしいられていたのではないかと思われる。さらに大坂城中では、江戸や国元の自邸での生活様式とはことなっていたにちがいないので、これも負担になっていたであろうと思われる。

これだけが原因というわけではなからうが、上山藩歴代藩主（一〇名）のうち三名が大坂加番中に客死している。しかしそれだからといって、大坂加番が上山藩にとつてあらゆる面で負担になっていたというわけではなく、これにより禄高三万石の上山藩の実質収入一万二千石に匹敵する合力米が藩の収入になるので、重要な財源であつたといえよう。

京都において漢蘭折衷派の名医として名をばせていた荻野元凱が、大坂加番として在坂中の上山藩主松平山城守信愛を往診した記録が、山崎文庫所藏の『松平山城守請招記』である。

文化元年（一八〇四）一〇月一三日荻野元凱は京都から大坂

におもむき、内淡路町三丁目、米屋徳兵衛方を旅宿とさだめ、その翌日から一〇月二七日までの一四日間、大坂城内に滞在していた信愛を毎日往診した。この記録はわずか一二丁の短い綴りで、信愛の病状や経過についてはまったく記載されておらず、医史的にはあまりみるべきものはないが、ここに藩医奥山玄育の名が登場する。すなわち信愛の手医師として「奥山玄育、遠藤長庵、吉川道智」の三名の名があり、初診の一〇月一四日の条には

奏者案内にて書院へ罷通茶烟盆火盆等出家老人医者等
面会其後相診候事診了後坐于本席御容体等申述其後祝酒
料理等出申刻退出

とあって、玄育らは元凱と対診をおこなった様子をする事ができた。どのような交渉があったのか、この記録にはしるされていないが、信愛の容態や治療について相談がおこなわれたものと思われる。

元凱の往診や玄育らの治療の甲斐あって、信愛の病は無事全快し、この年の一二月二八日には床揚げの祝儀がおこなわれた。しかし翌文化二年（一八〇五）三月二七日、信愛は急病のため加番役のまま、大坂城内で死亡した。

この『請招記』で興味深い点は、元凱が京都の自邸へ書状をおくった日の頭に、算用数字で回数がふざれている。「1」から「10」までに問題は無いが、「11」を「101」、「12」を「102」などと記載していることである。また金子の出納をしるした條の頭に「Gin」とローマ字で注がふざれているのも興味のあ

る所である。

山崎文庫にはこのほかにも、七部の元凱の往診記録が収蔵されている。

（平成五年十二月例会）

幕末薩摩藩と大円寺

中西淳朗

幕末の薩摩藩では、島津家江戸屋敷の菩提寺として、三田台町の大円寺（曹洞宗）と目黒行人坂の大円寺（天台宗）と関係があったという。しかし後者は嘉永元年以後のことであり、前者は延宝元年、島津光久の嫡子綱久の葬儀以来で、島津家との交際期間に百七十五年の差が両者に認められる。従って三田台町の大円寺の方が高輪の屋敷に近いこともあって、法事等の比重が大きくなることは当然である。

かの戊辰戦争の折、「横浜軍陣病院」に入院し傷病死した將兵の数を『横浜病院の日記』から数えると十一藩五十三名に達する。中でも薩摩藩は最も多く二十三名で、四十%をこす傷病死者数を占めたにも拘わらず、どこにどんな形で葬られたかは余り知られていない。そこで今回、『横浜病院の日記』を資料として、薩摩藩傷病死者等について調査した結果を報告した。

一、江戸切絵図の芝高輪辺図をみると、三田台町で伊皿子